様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０５８６３

研究課題名（和文）戦前期・日本農村のムラ・イエ機能のメカニズム・デザイン-農家ミクロデータによる-

研究課題名（英文）The mechanism design of family and village in rural Japan before the war : Using micro data of the farm household economy

研究代表者
浅見　淳之（asami, atsuyuki）

京都大学・農学研究科・教授

研究者番号：６０１８４１５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではシグナリングとコミットメントを理論的枠組とし，戦前期日本農村における交際費・冠婚葬祭費を分析した．農家経済調査個票を用いた推計により，社会階層が高いほど交際費が高いことを示した．また降水量を所得の操作変数とした推計を行った結果，所得変動に依存しない交際費や冠婚葬祭費への恒常的な支出が社会階層を問わず観察された．さらに，整理簿の分析により，香典，会費，餞別という周囲に顕示する消費と社会階層との間に正の相関関係を確認した．以上の結果から，昭和恐慌期・終戦直後期を対象としても，イエの顕示的消費を通して能力の高い上層農が周囲に認知されて，ムラの階層が維持されていたと考えられる．

研究成果の学術的意義や社会的意義
現段階の日本農村では、地域全体で担い手を支援し地域の共同活動を支えていく、ムラ機能が重要視されている。ムラとイエの関係は戦前期より農村社会学によって緻密に検証されてきたが、この関係は合理性が組み込まれた仕組みで設計されているのだろうか、またこれは計量的に科学的に検証できる事実なのだろうか。本研究でははじめてシグナリング理論を基礎とする経済学によって、農村社会学で扱われてきた領域を科学的に解明することに成功した。そこでは戦前期の農業簿記による日々の記録が、パネルデータとして分析の対象となっており、貴重な経済データとしての簿記記帳の意義が確認できる。

研究成果の概要（英文）：This study tests whether expenditures on social interactions and ceremonies work as signals reflecting social status in the rural society of pre-war Japan. For this, we use household panel data collected between 1931 and 1941. Cross-sectional estimations find higher social expenses for households in a higher social position proxied by residential land size. Using rainfall as an instrument for household income, our IV regressions show constant spending on social events regardless of income fluctuations and social positions. Thus, regular spending is necessary for the upkeep of their status in closely-knit communities in pre-war Japan.

研究分野：農業経済学

キーワード：整理簿　交際費　冠婚葬祭費　シグナリング　分離均衡　コミットメント　戦前期　農家経済調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現段階の日本農村では、地域全体で担い手を支援し地域の共同活動を支えていく、ムラ機能が重要視されている。日本農村のムラ機能は、イエ機能と結びついて実態が確認された。しかし、それは計量的に検証されたものではなく、またその仕組みの合理性を科学的に説明したものでもなかった。日本農村に戦前より根源的に存在していたイエ機能とムラ機能を科学的に解明することが、現段階の日本農政にとって必要である。本研究では「農地改革までの戦前期日本の農村を対象に、ムラ機能・イエ機能の仕組みの合理性を、経済学によって計量的に明らかにする」ことを目的とする。そのために本研究では、戦前期に農林省で刊行された農家経済調査統計の個票原簿をパネルデータとして利用するとともに、原簿に至る日々の日記帳である整理簿を整理しこれをデータベース化して、計量経済学的に分析する。昭和 17 年から 23 年までの、そこで見られるムラ機能とイエ機能のメカニズム・デザインを明らかにしていく。

２．研究の目的

整理を進めるにつれて、ムラ機能を発揮するのはイエによる「シグナリング」に基づくメカニズム・デザインであるとの認識に至った。すなわち、日本農村は伝統的に、特に戦前期には、社会階層と共同体によって社会が維持されてきた。社会階層においては、上層農にパトロンとしての政治的効用を満足させ、政治能力の発揮を促すことで社会秩序が安定する。しかし階層に伴う戸主の政治能力は観察できず、観察可能な経済活動によってこれを認めてもらう必要がある。すなわちシグナリングである。そのため社会階層の高い家計において、シグナルとして交際や冠婚葬祭への積極的な出費がなされていたと思われる。これは「ステータスシグナル」であったといえる。また共同体内では、ツキアイを維持することが必要であった。そのために、所得に余裕のある階層では祝儀などの交際費を恒常的に支出して、冠婚葬祭も相応に行い、律儀にツキアイを大切にしていた。これは、自分がツキアイを維持するに足る信頼があることを示す「信頼シグナル」を送っていたと解釈できる。ツキアイにコミットすることで、機会主義的行動はとらない信念を相手に形成させていたのである。

戦前期は、小作争議や終戦によって社会階層は大きく変化し、また経済更生運動や新生活運動において、これらの過剰な支出を抑えようとしてきた歴史的事実もある。しかしそれでも、社会秩序を維持するために根本では、交際、冠婚葬祭によるシグナリングという活動は常に行われてきたのではないだろうか。 本稿ではデータが入手できる、昭和恐慌期（1931~1941）と終戦直後期（1945~1948）を対象とする。 農村社会が大きく動いた同時期においても、交際費と冠婚葬祭費支出に基づく「ステータスシグナル」と「信頼シグナル」が発信されていたと考え、この仮説を経済学に基づき数量的に明らかにした。

３．研究の方法

農家経済調査結果表の原票となる整理簿の整理を行った。これは昭和 20 年から昭和 23 年までの全国都道府県の農家世帯の日々の収支の日記帳である。まず農家全体の所得的収支と財産的収支の年間の結果を取りまとめた統括計算書を整理し、これをすべて業者に委託してデータベース化を行った。次に「交際費」と「冠婚葬祭費」の整理を行い、結果票の交際費と冠婚葬祭費の費目が実際にはいかなる収支記録から構成されているかを整理簿の原簿（日記帳）から拾い上げ、そのデータベースを完成させた。そのデータに基づき、戦前期（戦争期）の農家のイエ、ムラにおける社会活動が所得や社会階層に応じてシグナリング活動においていかなる違いがあるのかを、計量経済学的に検討した。

４．研究成果

シグナリング理論における分離均衡とコミットメントとしてのツキアイ支出に注目して、シグナリング理論から以下の仮説を戦前期日本農村に対して設定した。

仮説：社会階層が高いほど、観察できない政治能力を伝達するために、ステータスシグナルとして交際費・冠婚葬祭費がより多く出費される、顕示的消費がみられる。

これを実証するために、推計式を以下の（１）式のように特定化した。

$$E_{it} = \gamma_0 + \gamma_1 S_i + \gamma_2 l_{it} + \gamma_3 \boldsymbol{h_{it}} + \lambda_t + \epsilon_{it} \qquad (1)$$

E_{it}家計iのt年の交際費および冠婚葬祭費、以下同様に、lは所有土地面積、$\boldsymbol{h}$は家計の特徴を表すベクトルで、世帯員数と家長の年齢を含んでいる。S_iは社会階層を表す調査初年度の宅地面積、λは年ダミー変数、ϵは誤差項である。

結果は第１表に示した。交際費の推定結果を示す 1 列目より、宅地面積が大きいほど交際費への出費は高いことがわかる。 2 列目は所得を制御した推定結果である。 所得を制御してもなお、宅地面積が大きいほど交際費が大きい。 この結果は、社会階層が高い家計ほどステータスシグナルとしての顕示的消費がみられるという仮説と整合的である。 また所得の係数は有意に正であり、所得階層が高いほど交際に積極的になることが認められる。

次に、 冠婚葬祭の推定結果を示す３列目では宅地面積の係数は有意な値をとらなかった。所得を制御した４列目では、仮説１に反して宅地面積の係数は負に有意となった。

第１表

	(1) 交際費	(2) 交際費	(3) 冠婚葬祭費	(4) 冠婚葬祭費
宅地面積	0.566***	0.488***	-0.593	-0.704*
	(0.166)	(0.146)	(0.420)	(0.407)
農家総所得		0.963***		1.134***
		(0.095)		(0.212)
所有土地面積	0.018***	0.005	0.026***	0.011
	(0.004)	(0.004)	(0.009)	(0.009)
世帯員数	0.061***	-0.016	0.146***	0.055
	(0.017)	(0.017)	(0.043)	(0.044)
家長年齢	0.002	0.000	-0.002	-0.005
	(0.003)	(0.003)	(0.008)	(0.008)
年ダミー	YES	YES	YES	YES
R^2	0.17	0.33	0.09	0.15
観測数	473	473	455	455

次に、ステータスシグナルにおいて、交際費・冠婚葬祭費のなかで、具体的にどの項目がシグナルとして機能していたのかを、終戦直後期(1945~1948)を対象に明らかにする。 そのため、現存する農家経済調査整理簿の日付ごとの支出項目と金額をすべて組みなおして、再整理を行った。 1945 年は 239 戸、46 年は 376 戸、47 年は 33 戸、48 年は 3 戸の整理簿が収集できた。 そのうえで支出項目の日付と内容から交際費および冠婚葬祭費の内訳を分類した。ここでは、 交際費・冠婚葬祭費の各項目を被説明変数とし、社会階層を表す宅地面積との関係を推計した結果を示す。なお、全ての推計において所得的収入と調査年度を制御している。紙面の都合上、交際費の結果のみを示すことにする。

交際費の内訳として、支出項目のうち、香典、悔、死者見舞、燈明など葬式関連費用を「香典」、盆、彼岸、四九日など法要関連費用を「法要」、病気見舞や見舞に関する項目を「見舞」、年始や結婚祝い、 出産祝いなど祝全般を「祝儀」、餞別、贐などを「餞別」、はがき、切手などの通信費と汽車賃などの交通費を「通信交通」、礼金や御礼などを「謝礼」、同窓会、慰労会、送別会などへの出費を「会費」、火事見舞、水害見舞などを「天災火事」、子供へ、使いへ、年玉などを「小遣い」、心付け、寸志、志などを「心付け」、旅費や土産などを「旅行」、新築見舞や家屋見舞などを「普請」、酒に関するものを「酒」、来客用茶、来客用魚などを「来客」、贈物や進物、「氏名＋へ」のような贈与が確認できる項目を「贈与」、現物のやり取りを「現物」としてそれぞれ分類した。なお、「現物」は価格で評価した。香典、祝儀については交際費として、「法要」は冠婚葬祭費として、それぞれまとめた。

第２表は宅地面積が各支出項目に与える影響を表している。「香典」と「会費」において推計値が正に有意となった。また餞別に関しても限界的に有意な結果を示した。これらは、顕示的にステータスを示すことが可能な項目に該当する。すなわち終戦直後の農村においても、相手に明確に金銭を示すことのできる顕示的な行動がシグナルとして機能していたと解釈できる。特に「香典」が階層を形付け、葬式を通して村社会が秩序づけられていたことは注目に値する。また所得的収入の係数をみると、「香典」、「見舞」、「祝儀」、「通信交通」、「会費」、「天災火事」、「小遣い」、「贈与」、「現物」の係数が正で有意であり、所得階層としてみるならばこれらの顕示的な項目がシグナルとなっている。

以上のように、本研究ではシグナリングとコミットメントを理論的枠組とし、戦前期日本農村における交際費・冠婚葬祭費を分析した。農家経済調査個票を用いた推計により、社会階層が高いほど交際費が高いことを示した。冠婚葬祭費については、頑健な結果は得られなかった。さらに、整理簿の分析により、香典、会費、餞別という周囲に顕示する消費と社会階層との間に正の相関関係を確認した。

以上の結果から、昭和恐慌期・終戦直後期を対象としても、顕示的消費を通して能力の高い上層農が周囲に認知されて、階層が維持されていたと考えられる。また交際費・冠婚葬祭費への恒常的な支出を通して、周囲からの信頼を得てツキアイが維持されていたことが伺える。このように社交的消費は戦前期の日本農村において、政治能力や信頼の正確な情報伝達に貢献し、その結

果、農村社会の秩序が保たれていたといえよう。

第 2 表

項目	宅地面積			所得的収入		
	係数		標準誤差	係数		標準誤差
香典	2。331	**	1。042	0。001	*	0。001
見舞	-2。128		1。906	0。005	**	0。002
祝儀	-2。243		1。465	0。004	**	0。002
餞別	0。746		0。465	0。000		0。000
通信交通	-0。179		0。265	0。000	**	0。000
謝礼	-0。968		0。649	0。000		0。000
会費	1。048	*	0。596	0。000	*	0。000
天災火事	0。006		0。207	0。000	*	0。000
小遣い	-0。009		0。473	0。001	*	0。001
心付け	-0。048		0。040	0。000		0。000
旅行	-0。392		0。888	0。001		0。001
普請	0。089		0。063	0。000		0。000
酒	-0。215		0。140	0。000		0。000
来客	0。052		0。105	0。000		0。000
贈与	-0。711		1。081	0。002	*	0。001
現物	1。678		3。461	0。008	**	0。004

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山内彩生・浅見淳之
２．発表標題 戦前期における農家女性の家事と農業の配分デザイン　マルチタスク問題からの接近
３．学会等名 日本農業経済学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山添大輔・浅見淳之・三浦憲
２．発表標題 戦前期農村の社会階層におけるシグナリング ―昭和恐慌期と終戦直後期の交際費と冠婚葬祭費―
３．学会等名 日本農業経済学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	丸　健 (maru ken) (10721649)	西武文理大学・サービス経営学部・講師 (32417)	
研究分担者	草処　基 (kusadokoro motoi) (90630145)	東京農工大学・（連合）農学研究科（研究院）・准教授 (12605)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関